

IMPACT Journalism Day

い HASHT E SUBH El Watan LA NACION AZERNEWS DELO The Daily Star LE SOIR L'ECONOMISTE DU FASO 10VOR10-SRF Le Messenger EL TIEMPO POLITIKEN KOMPAS RESPEKT AI Masry AI Youm LE FIGARO Mon Quotidien El Heraldo Fraternité Matin Pactu THE IRISH TIMES L'Orient LE JOUR l'express EL PAIS L'ECONOMISTE THE NATION FOLHA DE S.PAULO The Asahi Shimbun DONG-A-ILBO RZECZPOSPOLITA le soleil Kommersant THE STRAITS TIMES Le Courrier de Russie City PRESS THE PHILIPPINE STAR 24 heures Tages-Anzeiger la Region KHAO SOD THE HINDU T24 Tribune de Genève The China Post USA Today HAARETZ La Presse AJ+ EGYPT INDEPENDENT Les échos du Nord Positive.News Daily Monitor H KAΘHMEPINH CORRIERE INNOVAZIONE JEUNE AFRIQUE

Today, 50 of the world's leading newspapers are publishing, in more than 40 countries, 60 positive innovations that are changing the world. #StoryOfChange

世界の課題 解くヒント

インパクト・ジャーナリズムの日

国際報道キャンペーン「インパクト・ジャーナリズムの日」が24日、5年目を迎えました。難民や貧困、気候変動。世界を悩ます様々な課題を解決する道筋を示し、明日への希望につなげたい。そんな思いでメディアNPOスパークニュース（本部・パリ）が呼びかけました。今年は40カ国から朝日新聞を含む計50の新聞やニュースサイトが参加。一部の記事を抄訳し、お届けします。

デジタル版で、ほかの記事も読めます



アフガニスタン国立音楽専門学校にある教室の一室で、アフガニスタンの少女ザリファ・アディーブさんがバイオリンを弾いている。ポップ歌手を夢見てきたが、最近になってクラシック音楽に対する熱意がわき上がってきたという。

HASHT E SUBH

少女オケ 希望の象徴 @アフガニスタン

に逃れ、そこで15歳まで暮らした。2014年末に帰国し、2年間、この学校でバイオリンを習った。10年前には、こうした音楽の授業は完全に禁止されていた。学校は1974年に設立され、88年まで続いた。だが、戦争により中止され、武装勢力タリバン政権下は音楽を「反イスラム」として違法とした。学校が再開したのは、カルザイ元大統領が就任した時だった。2008年、現校長アフマド・ナセル・サルマストさんが、世界銀行から資金援助を受けた「アフガニスタン音楽復興」という計画を始めた。

少女75人を含む生徒250人が在籍し、アフガニスタンの少女だけのオーケストラがある。メンバーは12〜21歳で、様々な国際的な音楽祭に参加する。毎年、300〜400人が入試に臨み、合格はわずか50人。受験者のうちほぼ半数が、ホームレスか孤児だ。学校では裕福な子も孤児も、同じ屋根の下で授業を受ける。彼らは痛みや希望、喜び、悲しみといった感情を音で表現する。サルマスト校長は「本校は暗闇の中にある希望の島のような、未来のアフガニスタンの象徴なのです」と話す。



マダガスカル島の海でタコを捕まえる漁師。数日中にスペインや日本の食卓に上る。

豊かな海 タコ禁漁から

@マダガスカル

マダガスカル島の沿岸は生き物であふれている。しかし、外国船による乱獲と気候変動による極端な天気、森林伐採による土壌流出などで、海が衰え、人々の生活の質も下がった。海洋保護区を設定する場合、地元の漁民に背景説明がなかったり、収入が減る漁民への補償が十分でなかったりするが通例だ。結果として、保護活動家と地元住民がならみ合うことがよくある。そんな中、環境保護団体「ブルー・ベンチャーズ」（本部・ロンドンのアラスター・ハリスさんはタコを使って、深い海と連携している。タコが理想的なのは成長が早いからだ。少しの間、禁漁区を設けるだけで成果が表れる。「タコを保護することが第一の目的ではない。幅広い生態系を守るための媒介に使う。素早く回復すれば、反対していた住民とも対話できるようになり、永続的な保護区をつくることにもつながる」とハリスさんは話す。

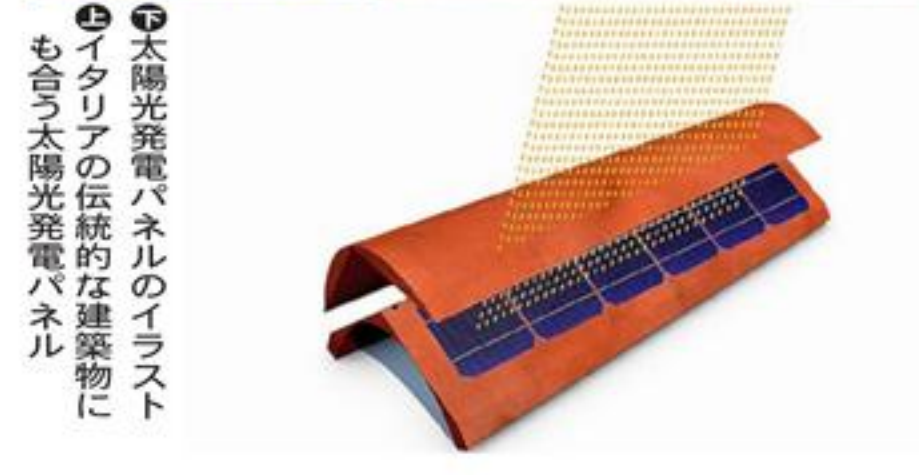
景観乱さぬ 太陽光パネル

CORRIERE INNOVAZIONE

@イタリア



欧州の歴史的地区で建造物に太陽光発電パネルを取り付ける許可を得るのは大変だ。景観規制が厳しく、パネルを見えないようにしないと許可されない。これまではパネルを隠したり、屋根材や石材に埋め込んだり、目隠しの壁で覆ったりしてきた。ただ、一定の高さから見れば黒いパネルが見えてしまう。イタリア北部ピエモンテの企業「ダイアック」は「見えないソーラー」という製品を開発した。太陽光パネルを、石や木などのありふれた建材を模した高分子化合物に埋め込むことで、人の目からまったく見分けられなくなる。地元で樹脂を使った芸術作品を作ったジョバンニ・カンダリアーニさんが、レンガやタイルなどに見分けられないほどでありながら、光を通す高分子化合物を見つけた。



太陽光発電パネルのイラスト。イタリアの伝統的な建築物にも合う太陽光発電パネル。

標準品が1㎡あたり1〜2㎡（約240円）のところ、見えないソーラーは7㎡。カンダリアーニさんは「歴史的地区のために手作りしたのだから」と説明する。普及にはコストを下げる必要がある。手作業に代わる製造機械を開発しようとネットを通じ資金を集めている。（コリエレ・インヴァツィオーネ・イタリア）

見えなくても指で感じて

@スロベニア



視覚障害者のために開発されたタブレット端末「フィーリフ」を使う子ども。フィーリフは、画面に凹凸のあるタクト端末だ。彼女は指で追いついて、四角い形を上手になぞる。これに似た機械は以前にもあったが、5万時（約600万円）と高額だった。フィーリフの価格はその100分の1だ。スロベニアのデジタル関連会社の創業者、セルジコ・ヘルマイヤーさんがフィーリフを発明した。2013年、ヘルマイヤーさんはドキュメンタリー番組を見て、アイデアを思いついたという。番組では、耳と目が不自由な人たちが取り上げていた。視覚を失うことで多くの経験を奪われ、機器が高価なせいでコミュニケーションがとれない。周囲の世界と遮断されている。ヘルマイヤーさんは心を描きだされた。

鉛筆で形を感じられないけど、フィーリフでは感じられる。人のうちの一人となった。（テロ・スロベニア）

リサイクルで世界平和を

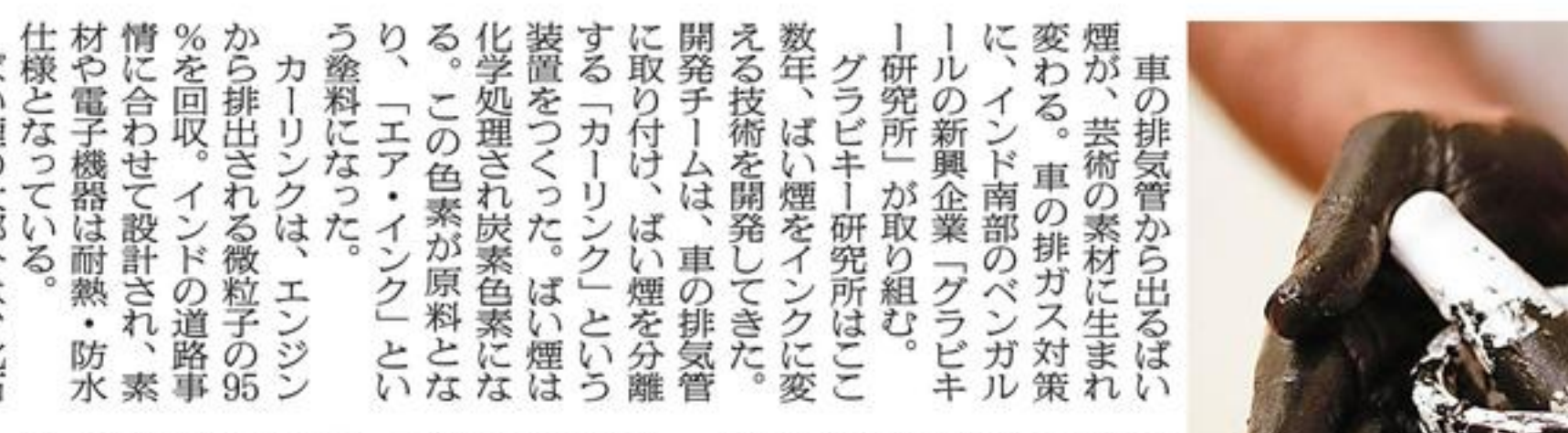
朝日新聞



今年で設立10年を迎えた日本環境設計（本社・東京都千代田区）は、資源のリサイクルに積極的に取り組んできた会社だ。その一例が衣服。同社は小売店に回収箱を置き、消費者が持ち込む古着などを集め、工場ですべて再生処理する。服の素材である綿は自社工場でもエタノールに生まれ変わる。ポリエステルは協力会社で再生処理してきたが、今年中に自社工場でも再生処理する。この会社が目指すのは、楽しくリサイクルに取り組むこと。息の長い事業を展開するためだ。社風の表れが、米SF映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」に登場するタイムマシン「デロリアン」を実際に走らせるイベント。燃料は回収した古着を再生し、生み出したエタノールだった。この映画が大好きだという会長の岩元美智彦さんが着想し、作中でデロリアンがタイムスリップした年月日と同じ2015年10月21日に都内で開催。岩元さんは「世界の戦争の多くは石油など地下資源の争奪が原因で起きている。地上にある資源を循環させて、世界平和を実現させたい」と夢を語った。（秋山剛志）

大気を浄化 ばい煙インク

THE HINDU @インド



車の排気管から出るばい煙が、芸術の素材に生まれ変わる。車の排ガス対策に、インド南部のベンガールの新興企業「グラビキー研究所」が取り組む。グラビキー研究所はここ数年、ばい煙をインクに変える技術を開発してきた。開発チームは、車の排気管に取り付け、ばい煙を分離する「カーリンク」という装置をつくった。ばい煙は化学処理され炭素色素となる。この色素が原料となり、「エア・インク」という染料になった。カーリンクは、エンジンから排出される微粒子の95%を回収。インドの道路事情に合わせて設計され、素材や電子機器は耐熱・防水仕様となっている。ばい煙の大部分は、化石燃料が不完全燃焼することによって生まれる微粒子と炭素からなる。微粒子は、呼吸器の病気を引き起こす要因になる。環境団体によると、インドの都市のうち90%が大気汚染の基準値レベルを超えている。グラビキー研究所はクラウドファンディングによる資金集めで事業拡大をめざし、車だけでなく煙草や発電機からもばい煙を集める考えだ。研究所のアニルド・シャルマさんは「世界の黒い染料のうち15%がエア・インクになれば、隠された大気汚染に終止符が打てる」と語る。これまでに集めた微粒子の量から換算すると、1.6兆分の微粒子を浄化したことになる。（ヒンドゥー・インド）

燃料が不完全燃焼することによって生まれる微粒子と炭素からなる。微粒子は、呼吸器の病気を引き起こす要因になる。環境団体によると、インドの都市のうち90%が大気汚染の基準値レベルを超えている。グラビキー研究所はクラウドファンディングによる資金集めで事業拡大をめざし、車だけでなく煙草や発電機からもばい煙を集める考えだ。研究所のアニルド・シャルマさんは「世界の黒い染料のうち15%がエア・インクになれば、隠された大気汚染に終止符が打てる」と語る。これまでに集めた微粒子の量から換算すると、1.6兆分の微粒子を浄化したことになる。（ヒンドゥー・インド）